

## 5. 成果と波及効果

小玉 敏也

3つの取り組みには、以下のような成果と課題があった。

### 1) 成果と波及効果

① ESD 塾の開催は、身近に大学生とふれ合えない児童生徒にとって、学習面にとどまらない情緒面での教育効果があったと推察される。それは、後日の学校教育、公民館、地域団体関係者へのヒアリングで明らかになったことである。「わが子が、最終日に大学生と別れた後に、泣きながら帰ってきた」「学校では、あのような笑顔をなかなか見られない」「お盆の時期に、あれだけの小中学生が3日間も集まったこと自体が画期的だった」等々の発言が、この取り組みの効果を裏付けている。また参加した大学生も、中山間地の教育活動に携わるのは初めての経験で、地域の自然・文化の価値と、支援を得た人々の温かさを実感できたことは、彼/彼女の成長の糧となったことは間違いない。また、ESD 塾の取り組みを通して研究所と公民館の協力体制がいつそう強化され、次年度の開催につながる基礎ができた。2020年3月には、遠山郷未来フォーラムという地域の大人と中学生が集う会議が開催されるが、そこに大学生も再度参加して、地域外の立場から意見を表明する機会を得ている。

わずか3日間のイベントではあるが、そこに参加する大人と子どもは、外部の人間が関心を持ち続けることで、遠山郷の未来を考え、行動するモチベーションを得ているものと考ええる。

② 遠山郷スタディ・ツアーは、朝岡研究員が中心となって飯田市街地の高校生と大学生が遠山郷で学習する機会を創り出すことができた。そこでは、遠山郷の関係者が地域の資源を若者に「語る」という行為そのものが、当事者の地域への思いを明確化し未来を考える契機となるはずである。また市街地の高校生が、同じ市内であっても遠山郷のことを初めて知る機会を得たことは、学校内での授業に慣れた生徒にとっては新鮮な驚きがあったに違いない。それは長期的に見れば、飯田市の未来を担う若者に対して、遠山郷をはじめとした他の中山間地区の潜在価値を理解させる取り組みにもなっている。また、一般的な普通科高校では、教科書を使用した授業や、受験を意識した授業になりがちであるが、地域の生の現実を学ぶことは、生徒の深い学びにつながっている。

③ 研究所の幼児教育に対するアプローチは、前年度に比べて訪問箇所も回数も増加し、保育園の活動への理解を深めることにつながっている。以前から各保育園は、自然を生かした教育活動に前向きではあったが、増田研究員の訪問によって、より方向性が明確

になり、地域創生とのつながりに気づいたものと思われる。また、研究員が幼児を対象にプログラムを実践したこと、保育者研修で話ができたことも大きな収穫である。

④ 本年度は、ESD を普及する地域起こし協力隊員が赴任した初年度でもあった。上記の各取り組みにその都度参加し、側面からの支援をいただいた。また、研究所の活動とは別に、地域の人たちと協力して独自の活動（食文化・学校支援・まちづくりイベント等）を始めており、次年度以降の活躍が大いに期待できる。

⑤ 7月に、小玉研究員が遠山3校の教員を対象に「学校を拠点としたESDの推進」という題で講演会を実施した。管理職も含めて全員参加の研修会であった。前年度は、ESD担当の教員に対する研修会であったので、近年のESD/SDGsの動向を伝える良い機会になった。

⑥ 遠山郷の和田地区に、和田小学校の保護者が中心となった「和田宿にぎやかし隊」が結成され、その活動が本格化してきた。前年度も行った秋の「街道縁日」だけでなく、地域外の講師を招いて、地域の産業振興、学校の統廃合問題等のテーマを自主的に学習する活動に発展させていった。とりわけ、東京都の郁文館高校と交流を始めて、首都圏の高校生が地域の伝統行事「霜月祭り」に参加し、地域をさらに活性化した。これらは、特筆すべき波及効果である。また、同地区では、まちづくり委員会委員長、公民館長、学校長、にぎやかし隊代表、保育園長、公民館主事で、「1500人委員会」という名称の団体を結成し、和田小学校と遠山中学校の存続と魅力化を図りながら、和田地区の人口を1500人まで増加させるための活動を進めることに決まった。2020年度から、本格的に動いていく予定である。

## 2) 課題

①2020年度から、遠山3校がユネスコスクールとして認定される見込みである。上村小学校は、小規模特任校制度の中で着実に児童数を増加させている。和田小学校は、にぎやかし隊と協働しながら、まちの活性化を視野に入れつつ学校の魅力化への取り組みが始まった。遠山中学校は、霜月祭りでの伝統的な舞の継承活動が認められて博報堂賞を受賞した。今後、ESD 研究所は、保育園と小学校の教育活動上の接続、保育園そのものの存続等を視野に入れながら、どのように関与していくか検討しなければならない。

②ESD 研究所では、地域おこし協力隊員との有機的な連携をとりながら、遠山郷に山村留学や自然体験活動ができる自然学校を設立できればよいと考えている。それは、まだ関係者と具体的に協議したわけではなく、その概要を検討できているわけではない。しかし、今後の遠山3校の長期的な存続を見通した場合に、現実的な検討に入る時期に入っているものと思われる。

③和田地区の2校（和田小学校・遠山中学校）も、10年後の学校のあり方を見据えて、存続のための取り組みを強化する段階に入った。上村小学校も、児童数が毎年一定数確

保できるような働きかけを続けていかなければならない。将来的に、もし学校がなくなることがあれば、人口流出が加速化し、地域の持続可能性そのものが問われる事態となる。今後、ESD 研究所は、公民館・市役所・学校・研究所等で組織する「ESD 地域創生研究会」の役割と活動を強化し、方向性を確認する議論の場を作り出す役目が必要と考える。

(こだま・としや 麻布大学教授／立教大学 ESD 研究所客員研究員)